

図書館評価と NACISIS-CAT/ILL

H 1 8 データベース実務研修

グループ演習

蝦原加奈子

土居 純子

松本 千恵

和田 由季

はじめに (土居純子)

1. NACSIS-CAT の現状 (土居純子)
2. 目録業務の価値と必要性 (和田由季)
3. 目録業務継続のために・・・評価制度の提案 (松本千恵)
4. 評価制度提案の難しさ (蝦原加奈子)
5. 全国規模の総合目録の充実をはかるために・・・(まとめ) (蝦原加奈子)

はじめに

国立情報学研究所の目録所在情報サービス（NACSIS-CAT/ILL）は、全国規模で大学図書館を結ぶ書誌ユーティリティである。このシステムにより、全国の大学図書館にどのような学術資料が所蔵されているのかが一目でわかり、それをもとに、学術資料の共同利用を円滑に行うことができる。業務の効率化や、学術情報の有効活用を果たす役割は大きい。現在、NACSIS-CAT/ILL への参加館は、大学図書館を中心に 1,100 館を超え（2006 年 9 月末）、また、図書書誌レコード数は約 740 万件、図書所蔵レコード数は約 830 万件を超えるなど、わが国有数の総合目録に発展し、学術情報基盤を支えている。（詳細は下表参照）

平成 17 年度末時点登録件数（累積）

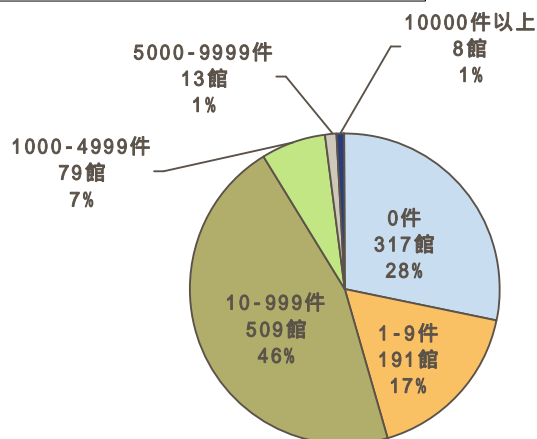
	図書書誌	図書所蔵	雑誌書誌	雑誌所蔵	著者名典拠	統一書名典拠	変遷マップ
平 17 年度	7,391,850	82,949,673	289,073	4,186,507	1,385,074	25,283	37,871

しかし、近年、重複レコードの増加など NACSIS-CAT/ILL の理念の衰退が疑われる事象が顕在化している。「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト」（以下「課題検討 PT」）の最終報告（平成 17 年 10 月）でも、共同構築の意識の希薄化、目録担当者の削減とスキルの低下、目録系業務の低コストでの外注化などが複雑に絡み合って、問題化していることが指摘されている。さらに同最終報告では、書誌ユーティリティへの貢献度を含めた新たな図書館評価指標を確立し、動機付けを図ることの必要性について述べられている。

本グループでは、NACSIS-CAT の現状と目録業務の価値について再確認し、一定レベルの目録業務を遂行できる業務基盤の構築に繋がるシステムのあり方について考える。

1 . NACSIS-CAT の現状

平成 17 年度の書誌作成件数と参加館の割合



平成 17 年度に作成された
図書書誌レコード
475,116 件

平成 17 年度参加館
1,118 館

書誌新規作成館統計（平成 17 年度末）

参加組織名称	2005
A 大学 附属図書館	29,684
B 機構 b 研究所 図書館	17,904
C 大学 附属図書館	14,940
D 大学 総合情報センター	13,762
E 大学 e 研究科 図書館	11,841
F 大学 附属図書館	10,806
G 大学 図書館	10,746
H 市立大学 学術情報総合センター	10,023
I 大学 図書館	8,616
J 博物館 情報管理施設	8,267
K 大学 附属図書館	7,358
L 大学 総合図書館	6,939
M 大学 図書館	6,682
N 大学 附属図書館	6,219
O 立中央図書館	6,062
P 大学 附属図書館	5,979
Q 大学 附属図書館	5,701
R 大学 図書館 中央図書館	5,437
S 大学 s 研究所 図書室	5,393
T 大学 図書館	5,332
U 大学 附属図書館	5,323
作成数上位 21 館の書誌新規作成数合計	203,014

平成 17 年度に新規作成された図書書誌レコードにおける作成館別の作成件数をまとめた、「書誌新規作成館統計（平成 17 年度末）」（http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/ncat_stat_c_crtfa_h17.html）を利用して、上記円グラフを作成した。

平成 17 年度中に、総合目録データベースに作成された書誌レコード数は 475,116 件に上るが、1 年間に 1 件も作成しなかった参加館（317 館（28%））、1 年間に 1-9 件作成した参加館（191 館（17%））が、全体の 45%を占めていることがわかる。また、5000 件以上作成した参加館は 21 館と全体のわずか 2%に過ぎないにも関わらず、これらの参加館が年間作成数の約 43%にあたる約 20 万件の書誌を作成している。

「課題検討 PT」中間報告では、参加館の間で、NACSIS-CAT は共同構築するデータバ

ースであるという意識が低下し、単に OPAC 用データを作成するためのツールとしてのみ認識している傾向にあることが報告されている。また、外注業者へのインタビューから、煩雑な図書書誌レコード調整の発生を嫌って、新規書誌を作成しない参加館の存在が明らかになっている。こうした参加館が「ほぼ作成していない館」となっているのではないかと推測される。

この現実を見る限り、総合目録データベース構築に積極的に参加館が存在する一方で、無関心な参加館が多数存在するという、参加館の二極化が起こっていることがわかる。NACSIS-CAT は「共同構築」という理念のもとに、創設、運営されてきたが、理念の形骸化が進んでいるのではないだろうか。

今回作成した円グラフは参加組織 ID ごとにデータを抽出して作成したものである。1 つの大学内で、複数 ID を取得しているが、書誌登録に使う ID は 1 つだけ、という参加館の事情や、図書館の立地による流通状況の違い、購入冊数の多寡は勘案していないため、より詳細な分析のためには、そういった特殊事情の勘案が必要となることを申し添える。

書誌の品質という観点から見た場合も、状況は同様である。「目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する検討ワーキンググループ」中間報告では、「重複図書書誌レコードの 4 分の 1 が全く同じ内容」であることが指摘されている。目録作成作業の基本である「検索」ができていないのか、疑問を抱かざるを得ない。また、基準を満たす書誌レコードを慎重に作成、修正している参加館がある一方で、基準を満たさない不適切な書誌レコードを安易に作成、安直な修正を行い、かえってレコード調整を発生させている参加館があることも、「NACSIS-CAT レコード調整方式検討ワーキング・グループ報告書」で報告されている。

こうした不均衡は、積極的に NACSIS-CAT へ参加している参加館に不公平感をもたらしている。現実的に、一部の参加館の「献身的」な貢献によって NACSIS-CAT が成立しているといっても過言ではない状況にもかかわらず、それを評価する仕組みは現在のところ存在しないからである。

今後も安定した基盤の下で目録業務を継続し、NACSIS-CAT の現況を改善していくには、我々が目録の価値について再認識すると同時に、業務体制の維持、強化につながる「評価」の存在が鍵になると考える。

参考

- ・ http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/ncat_stat_transition_record.html
(2006 年 10 月 4 日アクセス)
- ・ http://www.nii.ac.jp/CAT-ILL/contents/ncat_stat_c_crtfa_h17.html
(2006 年 10 月 4 日アクセス)
- ・ 「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト中間報告」(2005 年 4 月)
- ・ 「書誌ユーティリティ課題検討プロジェクト最終報告」(2005 年 10 月)

- ・ 「目録所在情報サービスを対象とする講習会等に関する検討ワーキンググループ中間報告」(2006年3月)
- ・ 「NACSIS-CATレコード調整方式検討ワーキング・グループ報告書」(2006年3月)
- ・ 「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会(2006年3月)

2. 目録業務の価値と必要性

1) 目録業務の価値

目録業務とは、利用者(学内および学外の利用者)に所蔵資料を提供するという図書館の最終目的のために、図書館側が行う一連の地道な業務のひとつである。

図書館で行う業務とは、簡単に言えば、資料受入 目録作成 検索補助 現物の提供、となる。その中で特にCATへの登録業務は、テクニカルサービスであるため、体的には理解されにくい業務であると、常々実感しているのではないかと思う。

一方、目録そのものについて考えると、公共図書館や小中高の図書室と同程度の目録では、大学図書館利用者のニーズを満たすことはできない、という点が指摘できる。大学にはさまざまな研究者があり、その中では、高等教育・学術研究機関として利用に耐えうる精度が求められる。簡単な目録では、求める資料にたどり着けないとか、資料収集に漏れが生じるなどの事態が発生することが懸念される。

このように目録業務は、研究者の目に見えないところで、縁の下の力持的に存在している。従って、問題なく業務が遂行できていれば、利用者は何も感じないであろう。しかし、もしもその精度や速度などに支障があれば、すぐに不便や不自由が発生し、分野によっては重要な障害となることも推測できる。まとめるのが難しいところではあるが、この点に目録業務の価値が見出されると考える。

2) 目録業務の必要性

目録業務の必要性については、CATへの登録による効果から考えてみたい。

CATへ登録することにより、ローカル目録(OPAC)へ取り込みを行い、その書誌データによって所蔵資料が活性化し、貸出時の個体識別ができるようになるということが考えられる。この結果、利用者や図書館職員それぞれの立場で効果が現れてくると考える。ここでは、利用者環境における効果を探り上げてみたい。

“書誌データによって所蔵資料が活性化し、貸出時の個体識別ができるようになる”ことは、一つには入手可能な資料が増加することを意味する。補足として、この“入手可能な資料が増加する”点については、遡及入力促進が大きな意味を持つことを強調しておきたい。

さて、具体的利用の場面では、多様な資料へのアプローチが可能となる環境や死蔵資料を利用する機会などが提供できるようになる。そして、利用者環境においては、貸出し冊数の増加、ILL 件数の増加という形をもってその効果は出現する。結果的には、大学の教育・研究活動へ貢献ができるとの判断が可能となると考える。

この効果により、目録業務の必要性が強調できるのではないかと考えてみた。もし、効果を数値として表現したいのであれば、利用冊数、ILL 件数などが適切となるであろう。

図書館の中で離れた立場にある目録業務と利用者業務において、それぞれの業務の効果と必要性が関連するという点は、興味深いことだと思う。

ただし、以上のように価値や必要性について考える時には、開架式であるか閉架式であるか、所蔵規模の大小、利用者の要求の度合い（簡単な要求から高度な要求まで）にもより、ものさしが異なることへの留意が必要であることを補足しておく。

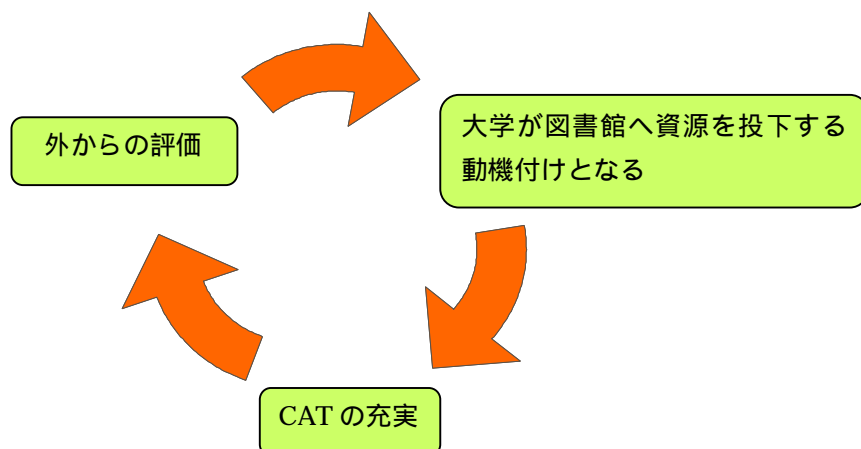
3. 目録作成業務継続のために（新制度の提案）

「共同分担入力方式」を基本理念とする NACSIS-CAT であるが、一章で示したように、書誌新規作成においても貢献する館と書誌データを利用だけする館に分かれている。この原因としては、共同構築に対する意識の希薄化、目録担当者の削減とスキルの低下、目録系業務の低コストでの外注化、参加館が総合目録構築に図書館の経営資源を投下しないことなどが原因として考えられる。アメリカの書誌ユーティリティ OCLC では、そもそも参加館は資格区分によって貢献の度合いが異なる（下図参照）が、NACSIS-CAT では参加館はみな同じ条件でデータベースを利用している。

資格区分	求められる活動	メンバー会議 出席資格	メンバー会議 での議決権
Governing member	すべての新規作成書誌を WorldCat に登録する。	有	有
Member	すべての新規作成書誌を WorldCat に登録する必要はないが、WorldCat のコンテンツの充実に寄与する。	有	無
Participant	OCLC の製品とサービスを自館の貢献なしに受けることができる。	無	無

参加館の資格を区別することなしに各館が NACSIS-CAT へ貢献しつづけるためには参加館の新規書誌作成をバックアップする仕組みが求められており、2004 年度からスタートした NII による遡及入力事業はこれに当てはまると考えられよう。この事業は多言語資料およびまとまった NC ノーヒット資料が対象で、規模の小さい大学は申請しにくいの

が現状ではあるが、外部機関からの補助金は参加館が大学の中で自身の重要性をアピールし、学内資源を獲得するために非常に重要な役割を果たす。大学自体の格付け・雑誌によるランキングが行われている昨今、図書館への外部機関からの評価という具体的な指標が大学経営陣に訴えかけるものは大きいと考えられる。



「参加館の二極化」という現象を解消し、参加館それぞれが共同構築の理念に基づき日々の業務を進めるためには、遡及入力事業のような補助金的性質を持つもののほか、NIIにより参加館を評価する仕組みが求められている。評価の内容としては、例えばCATへの新規書誌登録数や新規所蔵登録数などの貢献度に応じて、手当て（報奨金）を出すことなどが考えられる。

参考

・ <http://www.oclc.org/membership/levels/default.htm> (2006年10月5日アクセス)

4. 評価制度提案の難しさ（グループ内での自己検討）

このように私たちが考えてみた試案を「もし」ではあるが、NIIが受け入れ、実施に向けて考えていただけるとしても、新しい制度の導入にあたっては、NIIの立場や他大学への影響力を考慮すると、とても慎重にならなければならないことだと思う。

また、現在、実際に進行している遡及入力事業のこともあるわけで、それとの関係をどう位置付けるか、など（たとえば、これは評価のタイミングの違いだが、手当ての二重取りにならないようにするために、新規書誌を遡及事業のものと、そうでないものを区別しなければならないとか、重複書誌の作成を考慮するとか）いろいろな難しさがあるかと思われる。

ここで、現場と評価制度との関係をつなぐための参考として、「新規書誌を作成しなければならない状況をもつ図書館とは何か？」について、限られた範囲にはなるかもしれないが、私じしんの現場の経験等から考えられる点をピックアップしてみたい。

NIIの立場の方のお心に、もしも、留めていただけたところがあれば幸いである。

1) 新規書誌作成にいたる背景

端的に言って、どういう場合、新規作成になるかということ、それは、CATを検索して書誌がヒットしてこない場合である。どういうものが未登録なのかということ、大きく2つに分けて考えられるかと思う。

ひとつは、まだ世の中に出回って間もない「新刊」のもの。これには一般の流通にのるものもあるし、入手しにくい外国の図書、非売品の報告書類などが含まれる。

もうひとつは、「稀少な蔵書」で、これには、出版者や、研究者の個人コレクションなどから寄贈を受けた場合や、(買う場合もあるかと思うが)図書館の設立時期にさかのぼって、その館ならではの歴史的な蓄積のある場合があると思う。また、ほかには、特に国立大学として地域で役割を果たされている大学などの立場について考えてみると、その地域の歴史や・たとえば産業などについて特色ある資料を所蔵されていることなどには、使命というか、独特の意義があるかと考えられる。

ところで、稀少価値を持つ図書を所蔵する大学とは、どういう条件のところか。考えなおすと、ひとつには、先に挙げた歴史的蓄積の点からいって、つまり、まだ大学が少なかった時代から存在する、設立からの歴史がある大学には、図書の収集についても、当時の蓄積が多い、という状況があると考えられる。

また、寄贈を受けるさいの状況について考えると、研究者との関係が非常に影響していると思う。というのは、実際に研究や調査をされた先生方の成果そのものも図書館へのご寄贈でいただくことがあるが、その研究調査活動でのコネクションをきっかけに、仲介をうけて、図書館への寄贈の話が決まることは多い。話が限定的になってしまい、恐縮だが、私じしんの経験した職場・・・経済学や社会科学を対象とした図書館の場合について、思いつくところを例にあげると、官庁や銀行の調査部、シンクタンクなどの他の研究調査機関からのおさがりをいただいたり、退職された名誉教授がお亡くなりになられたときの個人蔵書を御遺族や弟子にあたる先生の仲介でお受けしたりするケースもある。

そういった状況に恵まれやすい結果として、旧帝国大学の図書館や、伝統ある私立大学の図書館では、新規書誌作成の機会が多く、また必要とされてくると言えるかと思う。

2) 新規書誌作成以外でのNIIへの協力例(案として)

新規書誌作成の背景には、そういった傾向があることを指摘できるかと思うので、CATの充実にとって重要だが、活動として限られたところはあるかとも思う。

ここで、すこし話は揺れてしまうが、NACSIS-CATは全国の多くの大学が共同で構築し、

お互いの協力によって、運営されているデータベースであるという原点に立ち返って考えなおすと、そうでない大学・・・新刊にあたったとき以外にはそれほど書誌作成の機会がないかと思われる大学の場合には、新規書誌作成の件数以外で、どういう御協力のしかたをお願いできるかについて考えてみたい。

まず一つめとしては、ILLの依頼が規模の大きい大学図書館に集中するのを回避するために、所蔵のあるものについては、より積極的に提供を考えていただくようにするのはどうだろうか。(システムの優先表示をすとかで、解決したほうがいいかもしれないが)

また、CATやILLのシステムの理念や、初歩的な使い方について、目録業務初心者を教育する講習会の開催をしていただく等も考えられる。

そういった角度で、CATやILLに関連した活動への御協力を、ご検討いただければ比較的、協力活動参加へのハードルは低くなるのではないかとと思うがどうだろうか。また、NII側には、それらに対する評価もしていただくことを期待したい。

5. 全国規模の総合目録の充実をはかるために・・・(まとめ)

最後にまとめると、本稿では、現状では目録業務の負担に格差があるという問題意識からはじまって、多くの協力館を得るために、まず、目録業務の本質的な意義について考えてみた。そして、また現実として問題意識を持つ館のメンバーにより、それを業務として継続してこなしていくためには、外部からの評価が不可欠であるという意見が提出された。そして、現在、NIIでリードをとっている、遡及入力事業に並存するかたちで、補足的な評価制度を考えることはできないか、という話になった。また、たまたまではあるが、所属する組織の経緯からいって、NIIのCAT登録業務の位置づけについては異なる意識のメンバーもいたので、自己点検的に、提案の実現にはどのような注意点があるかについて、短い限られた時間ではあるが、討議しあった結果を御報告してみた。

異なる環境におかれた大学から出張してきた者たちで、同じテーマについて一緒に意見を出し合い、協力して話をまとめる・・・このような研修の機会は貴重なものだったので、NIIの皆様には、機会を与えていただいたことにも感謝したい。そしてまた、その成果として出てきた、私たちのささやかな提案についても、もし、ご検討いただければさいわいである。拙いかもしれませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

また、参加館各位、いろいろな環境にあるかとは思いますが、話し合っていて、より強く、「CATの構築とILLでの協力関係を通して、利用者により良いサービスの提供をできるよう、お互い頑張りましょう」という意識をもった。今回の研修でご縁のあった、お互い他大学の図書館員のかたがたと、この研修が終わると距離もまた離れてしまうが、今後ともご協力いただけるよう、どうぞよろしくお願いいたします。

補足：発表後の質疑応答より

1) 新刊登録の場合でさえ、図書の流通状況の影響を受けて、地方と都市の格差が起こりうるのではないかと、また、規模の小さい大学はどうしても件数の点で不利なのではないかというご指摘をいただいた。これらの「評価」の難しさについての指摘は、今回の提案の、次の段階で考慮しなければならない問題点だと考えられる。

2) 評価の証が必ずしも経済的なものにならなくてもよいのではないか、というご意見を NII および他大学の方から複数いただいた。経済的な褒章となるとどうしても財源の確保が必要であるという、説明もいただき、形式を問わなければ、評価制度について関心を持っていただくことはできた。

また、図書館が大学内の一組織であるという視点から、表彰制度のようなものを考えた場合、NII から図書館宛ではなく、事務部を経由するようにするだけでも、組織内部で好ましい影響が発生するのではないかと、というアイデアもいただいた。

末筆になるが、御静聴のうえ、コメントをくださった方々には感謝したい。